

## 極地海洋学シンポジウム

(1966年7月12日 気象庁にて開催)

日本海洋学会主催

### 序 言

北極は北極海の中に位し、南極は南極大陸の中央部に位する。北極海は大陸によってかこまれているが、南極海は逆に、大陸をかこんでいる。しかし、このいずれの海も、世界の海洋全体に支配的な影響をおよぼし、これらの海を知らずして海洋を論ずることはできない。したがって、SCORはSCARと提携し、国際協力によって、極洋を科学的に究明しようと意図している。

日本の極地研究が本格的にはしめられたのは1956年のことである。はじめは、大陸における諸現象の研究に重点がおかれていたが、したいに海洋研究の重要性が認識され、いまは南極研究観測の対象は南極海および大陸周辺の海域にまでひろげられた。

一方、北極海においても、米国との協同研究により、日本の科学者が、海洋学的研究に大きい貢献をしている。

一口に海洋の研究といっても、単なる物理学的な研究にとどまらず、化学的、地質学的、生物学的な研究が総合されて、はじめて海洋全体のすがたが把握される。

日本海洋学会では、極海の研究の促進の重要性にかんがみ、その仕事の一つとして、1966年7月12日気象庁講堂において、極海の海洋学に関するシンポジウムをひらき、いままでの研究成果を紹介するとともに、いろいろな角度から極海を考察し、こんこの研究に資することにした。はじめての試みであったが、シンポジウムに参加された講演者の努力により、予想以上の成功を収めた。シンポジウムで講演された内容を収録し、出席できなかった多くの研究者にも読んでいただけるように、この特集が計画された。

すでにアメリカおよびソ連は、南極海と北極海で大規模な海洋研究を展開している。世界の多くの国々の中で、米ソについて、極海研究の実力をもつものは、いまのところ日本しかない。第9回SCAR会議でも、日本がもっと積極的に南極海の研究に努力するように要請されたという。

極地では、しなければならぬ研究課題があまりにも多すぎ、その間のバランスの調整はむずかしい仕事である。しかし、極地研究に従事し、またそれに興味をもつ人々か、日本の海洋学の實力と、極地の海洋研究の重要性とを正当に評価されるならば、極地研究における海洋の比重を、いまより大きくしなければならぬことを、容易に理解されると思う。

コンヒーナー 三宅 泰雄 (東京教育大学教授)